

# 中国社会は

# どこへ行くか

中国人社会学者の発言

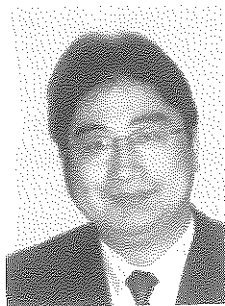
園田茂人 編



岩波書店



グローバル化とインターネット・ユーザー  
民が中国を変える？



劉 能



### ライフスタイル調査をめぐる

園田 劉さんは、学部、修士と、南開大学で社会学を勉強されましたが、前回の対談者だった関信平さんには教わりましたか？

劉 いいえ。私が大学に入学したのが一九八八年で、社会学を学び始めた頃、関先生は海外に出ておられたため、授業を受けることができませんでした。

園田 そうですか。ところで、北京大学の教員紹介用のサイトを見ると、あなたは、一九九九年から二〇〇〇年にかけてライフスタイルに関する調査を行い、さらに追跡調査を実施しているとのことでしたが、それは終わりましたか？

劉 まだ調査中です。今回は、ブラジルやロシア、インドなどの大国を調査対象にし、少数サンプルで調査しています。アメリカの未来研究所と共同で調査を実施しているのですが、中国国内では、北京以外に成都、上海、深圳の四都市で、それぞれ二〇の家族を追いかけ、彼らがどのようなライフスタイルを形成するに至っているかを、調べています。

園田 四つの都市すべてで、ですか？

劉 私は、成都と北京の二都市を担当しています。成都では近隣の小都市での家族を、

リュウ・ノン

1970年生まれ。北京大学社会学系副教授。  
著作に、『公益項目評価』(2004年、文匯出版社)、  
主な論文に、「広がるジェネレーション・ギャップ」(『人民中国』2002年第12期)、「中国都市地区普通公衆参加社会捐助活動的意願行為取向分析」(『社会学研究』2004年第2期)など。



北京では、農村だけでなく農村からの出稼ぎ者も対象にして調査を行っています。対象を決める際には、できるだけ典型的な家族を選ぶようにしました。

園田 「追いかけている」というのは、同じ家族を対象にパネル調査をしているということですか？

劉 ええ、その通りです。毎年一度、調査対象となっている家族を訪問し、その間の変化を調べています

園田 調査をするにあたって、仮説を設定しましたか？

劉 いいえ、まったく(笑)。人類学者がエスノグラフィを書くように、特段、明らかにしたいことをイメージせず、とにかく変化を調べようとしています。家族の中で何が起こったかだけでなく、コミュニティでどのようなことが起こったのか、衛生状態や自然環境がどう変わったかについても、関心を払っています。

#### 顕著な世代間ギャップ

園田 先述のライフスタイルに関する調査結果を分析した「現代中国人のライフスタイル」という論文を面白く読ませていただきました。実は、定期的に中国の社会学者の書く

ものをチェックしてレポートを作成しているのですが、あなたと最初にお会いした二〇〇四年以前の段階で、あなたの論文を読んでいたようです。あの論文の筆者だとわかっていたら、ちゃんと挨拶しておくべきでしたね(笑)。

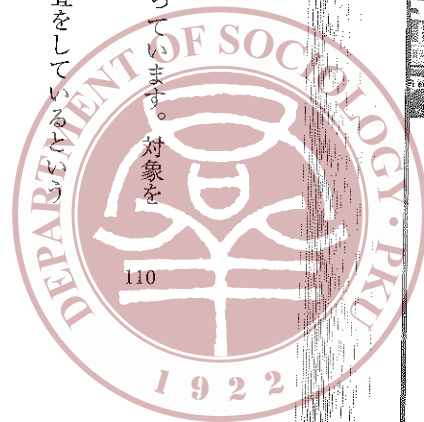
劉 実はこの論文、「広がるジェネレーション・ギャップ」というタイトルで日本語に翻訳され、『人民中国』に掲載されたんですよ。

園田 興味深いのは、世代の構成の仕方です。あなたの論文では、一九四五年以前に生まれた人が「戦争と建国期の世代」、一九四六年から五五年に生まれた人が「文章世代」、一九五六年から六七年に生まれた人が「回復期世代」、一九六八年から七九年に生まれた人が、このネーミングが面白くて、「サンドイッチ世代」。

劉 これは私の世代です(笑)。

園田 そして、一九八〇年以降の「一人っ子世代」と続くのですが、なんで「サンドイッチ世代」というネーミングにしたのですか？

劉 計画経済と社会主義的なライフスタイルに慣れていた上の世代と、西洋の影響を大きく受けた下の世代の間に挟まれているからです。上の世代では滅私奉公が重視されたのに、下の世代は「ミー世代」とでも表現できるほど、自分を中心に世界を理解するように



北京では、農村だけでなく農村からの出稼ぎ者も対象にして調査を行っています。対象を決める際には、できるだけ典型的な家族を選ぶようにしました。

園田 「追いかけている」というのは、同じ家族を対象にパネル調査をしているということですか？

劉 ええ、その通りです。毎年一度、調査対象となっている家族を訪問し、その間の変化を調べています

園田 調査をするにあたって、仮説を設定しましたか？

劉 いいえ、まったく(笑)。人類学者がエスノグラフィイを書くように、特段、明らかにしたいことをイメージせず、とにかく変化を調べようとしています。家族の中で何が起こったかだけでなく、コミュニティでどのようなことが起こったのか、衛生状態や自然環境がどう変わったかについても、関心を払っています。

#### 顕著な世代間ギャップ

園田 先述のライフスタイルに関する調査結果を分析した「現代中国人のライフスタイル」という論文を面白く読ませていただきました。実は、定期的に中国の社会学者の書く

ものをチェックしてレポートを作成しているのですが、あなたと最初にお会いした二〇〇四年以前の段階で、あなたの論文を読んでいたようです。あの論文の筆者だとわかっていれば、ちゃんと挨拶しておくべきでしたね(笑)。

劉 実はこの論文、「広がるジェネレーション・ギャップ」というタイトルで日本語に翻訳され、「人民中国」に掲載されたんですよ。

園田 興味深いのは、世代の構成の仕方です。あなたの論文では、一九四五年以前に生まれた人が「戦争と建国期の世代」、一九四六年から五五年に生まれた人が「文革世代」、一九五六年から六七年に生まれた人が「回復期世代」、一九六八年から七九年に生まれた人が、このネーミングが面白くて、「サンドイッチ世代」。

劉 これは私の世代です(笑)。

園田 そして、一九八〇年以降の「一人っ子世代」と続くのですが、なんで「サンドイッチ世代」というネーミングにしたのですか？

劉 計画経済と社会主義的なライフスタイルに慣れていた上の世代と、西洋の影響を大きく受けた下の世代の間に挟まれているからです。上の世代では滅私奉公が重視されたのに、下の世代は「ミー世代」とでも表現できるほど、自分を中心に世界を理解するように



なっています。実際、大学で授業をしていると、特に一九八四年より前に生まれたかどうかで、価値観が大きく異なっていることを痛感します。彼らとは、基本的なところで考え方が違うと思います。

園田 世代間で違いが見られないような価値観もありますね。たとえば、老親扶養に対する考え方。「年老いた親の面倒は誰が見るべきか」といった質問に、若い人も「子ども」と答えており、その点では上の世代と違いが見られません。

これに対して、「結婚する必要があるかどうか」といった問いに対しては、若い人ほど「そう思わない」とする回答が増えるのですが、親は子どもの結婚を心配していながら、子どもは結婚していないことを気にしないといった光景は、今では日常的なものとなっています。

劉 結婚観だけでなく、職業観にも変化が見られます。教育の高学歴化が進み、人々は専門的な職業を強く指向するようになってきているのです。専門的な仕事を極めようとする結果、晩婚化が進んでいるのですが、これには住居費の高騰も関係しています。住居が高いため、結婚を一年ほど遅らせるケースも増えています。

園田 日本では、晩婚化が少子化を生み出しているという文脈で社会問題と見なされる

部分がありますが、中国ではどうですか？ 晩婚化を解消しようという議論はありませんか？

劉 晩婚化は自然なプロセスと思われるからでしょうか、社会問題と見なされるようなことはないですね。実際私は、晩婚化の進展をよいことだと考えています。未成熟なまま結婚して後で離婚をするより、精神的に成熟してから結婚した方が、安定的な家庭生活を送ることができるじゃないですか。

園田 でも、精神的に成熟した時に、肉体的に成熟しすぎてしまうということはありませんか(笑)?

劉 そういうこともあるでしょう(笑)。しかし、精神的な成熟は結婚の重要な条件です。安定的な家庭生活が、「和諧(調和のある)社会」を作るのですから(笑)。

インターネットが紡ぐライフスタイル

園田 あなたの論文の面白い点は、もう一つあります。先ほどの論文で、いろいろと世間のギャップについて言及していながら、結論部分では、「特定のライフスタイルが形成されるにいたっていない」と指摘していますよね？



劉 ええ。しかし、それは七年も前の話で……。

園田 今は考え方が違う？

劉 ええ、今では、中国でも特定のライフスタイルが生まれつつあると思っています。

園田 具体的には？

劉 たとえば、七年前にも「小資(プチブル)」という言葉はありましたが、当時はほとんどリアリティを持っていませんでした。高学歴で専門職に就き、社会的地位が高いといった程度のイメージで、これが特定のライフスタイルやアイデンティティと結びついているとは思われていなかった。ところが、この六年ほどの間に、急速にインターネットが普及しました。

園田 確かに、その普及スピードは劇的ですわね。

劉 そして、これが人々のライフスタイルを大きく変えたのですが、以前の論文は、このインターネットの普及を念頭に置いていません。インターネットの普及により、私は現代の中国で、新しいライフスタイルが形成されつつあると思っています。

園田 非常に興味深いですね。この点に関して、少しこちらから情報を提供したいと思います。

私は毎年、学生たちに「海外ゼミ」と称して、海外の大学と一緒に調査・研究を進めることを奨励しているのですが、二〇〇六年は、早稲田の大学院生が復旦大学や韓国の延世大学の大学院生と一緒に、国際比較調査を実施しました。そして、学生だけでなく、その親にも質問票を配付して、世代間のギャップが見られるかどうかについて調べてみました。その結果、日本の場合、勤労意識に関しては、親の世代と子ども世代で大きな違いは見られなかったものの——たとえば、親も子も一生懸命働くことを美德と認識しているのですが——、インターネットの利用に関しては世代間ギャップが大きく見られました。ところが中国では、日本に比べても世代間のギャップが顕著で、若い世代は物質主義的で、個人主義的な価値観へとシフトしていました。インターネットの普及は、こうした価値の変化にどのような影響を与えたと考えていますか？ そして、それに対して、あなたはどのような評価を下していますか？

#### インターネットの社会的インパクト

劉 第一に、知識が簡単に入手できるようになったという点で、よい影響があったと考えています。グーグルで検索すれば、欲しい情報がすぐに手に入る。旧来の知的権威に対



する挑戦になった点でも、私は高く評価しています。

園田 学生があなたの授業に出席しなくなってもよい、ということですか？(笑)

劉 ええ、それでも構わないでしょう。実際、インターネットで調べれば、わざわざ出席しなくてよい授業もあるのですから。そして第二に、従来孤立していた人々が結び付けられるようになった。今まで市民の間にネットワークが存在していなかったのが、インターネットは、知らない人同士を結びつけ、情報交換をする空間、一種の公共空間(public space)を生み出すことになった。この点も非常に大きいと思います。

園田 以前、『世界』二〇〇六年九月号で行った対談で、潘允康さんが「あらゆる事柄に自由に自分の意見を言いたい人たちが、ものすごく増えてきている」と述べて、インターネットの普及がもたらした中国の変化を指摘しましたが、他方で、これが反日運動につながったという事実もあります。

劉 この点については後で私見を述べましょう。そして第三に、インターネットの普及によって逃避する空間ができた。

園田 逃避、ですか？

劉 ええ、逃避です。若い人の生活は決して楽ではない。親の世代が「勉強しろ」とうるさく言うてきますから。この点では、日本も同じですよね？

園田 そう思います。ただ日本の子どもの場合、部屋に籠ってインターネットやゲームで遊んでいるというケースもずいぶんありますよ。

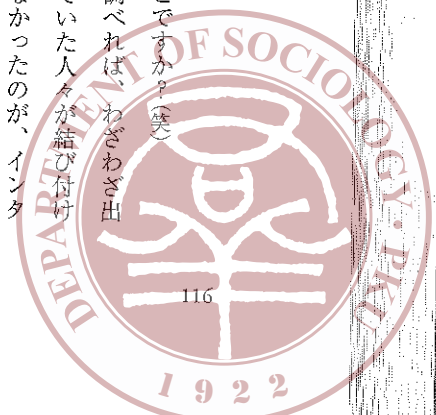
劉 中国では、親より早く起きるなど十代の子どもがもつとも忙しい。中央政府が、学校の授業開始時刻を朝の七時から九時に遅らせることを検討しているほどです。

実際、今の子どもたちは、よい成績をとるよう強い圧力を受けて育っています。その結果、フラストレーションが溜まっており、親とのコミュニケーションもうまくいっていません。また、親の方も、よき親になることを学べていない側面もあります。

園田 そういえば、復旦大学の学生が、親のサンプルを取るときに「この調査が子どもとのコミュニケーションのきっかけになる」といって協力を仰ぎ、回収率を高めたことを思い出しました。また陳光金さんとの対談でも、「中国の教育には冷却作用がない」といった議論になりました。

#### 家庭教育の貧困と「リアキリス體」

劉 それどころか、学校に親と子どもとの問題が持ち込まれることもあります。子どもが





親からしっかり支えられていないために、子どもが荒れてしまうことさえあるのです。これは、世代間のギャップという以上に、親が正しい知識を欠落させていることに原因があります。

実際、おおよそあらゆる社会問題の中で、家庭教育の貧困がもっとも深刻だと考えています。汚職でも住宅問題でもない。受験競争しか生み出さない家庭教育こそ、中国社会が抱える最大のアキレス腱です。

園田 ユニークな見解ですね。

劉 今後の中国の発展を考えた時、人材育成の問題は戦略的にも重要です。中国では、よい製品は作れても、独創的なアイデアをもとにしたイノベーションを生み出していませんが、どうしてでしょう？ 私は、家庭内の教育に原因があると考えているのですが。

園田 一般に産業化は、従来の製品の模倣から徐々に革新的な発明へと進んでゆくのが普通で、その意味で、現在の中国でイノベーションが進んでいないのも当然であるような気がします。

劉 大学で教えていて思うのは、試験に合格する女性の数が増えていること。男子は、試験競争の最初の段階でドロップアウトしてしまい、元気を失ってしまっている。彼らが、

本来果たすべき機能を果たしきれていない。

園田 私の大学院ゼミなど三分の二は女性で、特に海外から来た女子学生は一番元気ですけれど(笑)。

劉 ドイツや日本、韓国にはしっかりした職業教育制度がありますよね。しかし中国には、これがない。みな子どもを大学にやろうとするので、職業教育が見向きもされない。

園田 最近になって、政府も職業教育をテコ入れしようとしていますよね。  
劉 ええ。でもその道のりは険しいと言わざるをえません。

公共空間における社会的スキルの欠如

園田 話題を変えましょう。先ほど、「インターネットが知らない人同士を結びつけた」とされましたが、この点を少し説明していただけませんか？

劉 中国は長く、長老支配の社会でした。年輩者が人々の尊敬を受け、彼らが全体のルールを作る。こうした体制が長く続きました。

ところが、インターネットやブログの普及は、若い世代の声を急速に大きなものにした。彼らのコンピュータに対する知識や技術が、彼らの社会への発言力を強めることに





なつたのです。そして今や、その声は無視できないほどのものになった。しかし個人の情報発信能力が高まったものの、これが人々をつなぐ力になりきれいでないといつた問題があります。彼らに社会的スキルが足りないため、なかなか連帯を組むことができない。その結果、サイバー・スペースで過剰な自己主張と多くの摩擦が生じるようになっていきます。

園田 自身、身近なところでも、この摩擦を経験することがありました。私の仕事をみて興味をもったのかもしれませんが、実は私の一五歳になる息子が、第二外国語として中国語を勉強しているのですが、ある日、習いたての中国語を使って、Windowsのメッセージ機能を使ってチャットを始めました。ところがあるとき、息子が「北京の高校生とチャットを始めたのだけど、僕が日本人だとわかると『日本人は嫌いだ』といって攻撃してきた」と哀しそうな表情を浮かべて言ってきましたが、さすがにショックだったようです。

劉 彼らには社会的スキルが欠けているのです。

園田 では、どうしたらよいのでしょうか？

劉 やはり、教育に行き着くと思います。市民社会を作り上げるための教育を行い、公共空間でのふるまい方を学ぶ機会が与えられなければなりません。北京で開催されるオリ

ンピックは、こうした社会的スキルを習得する絶好の機会です。

この前開かれたテニスの中国オープンでも、あまりに観客のマナーが悪くて、審判が「ご静肅をお願いします」と繰り返しコールしていましたが、こんなこと、全豪オープンや全米オープンでは起こりませんよね。実際、北京市政府は、市民のマナー向上のためのキャンペーンを展開しています。

サイバー・スペースの中のポスト冷戦的心性

園田 反日運動の議論に戻りたいのですが、私たちは二〇〇三年からアジア・パロメーターという大規模世論調査を実施していて、二〇〇六年は、日本、韓国、中国、台湾、香港、ヴェトナム、シンガポールを対象に調査を行いました。その中で人々の対外イメージ、具体的には個々の国が自国によい影響を与えているか、悪い影響を与えているかについて聞いたのですが、中国の場合、学歴の高い回答者ほど日本の影響を「悪い」と判断する傾向がありました。彼らはインターネットをよく使う層です。その逆に、韓国の場合、高学歴者の方で対日イメージはよかったですのですが、どうしてこんな違いが生まれてしまったのでしょうか。



劉 サイバー・スペースでは、依然として冷戦もしくはポスト冷戦的体制が維持されているからです。インターネットをよく利用する若者は、国際的なニュースにも触れていますが、依然としてロシアと中国を一方の極、アメリカと日本、ヨーロッパを他方の極と見なす思考パターンを持ち続けています。

園田 インターネットを使っても、以前の考え方が変わらないということですか？  
劉 いや、むしろインターネットがポスト冷戦的心性を強化しているというべきでしょう。そして、彼らの意見がネットの中を駆け巡ることで意見がいつそう過激になっていきます。

園田 しかし、こうした状況は現実と齟齬をきたしていませんか？  
劉 そう思います。実際には、アメリカなどの大国と結びつくことが、中国の国益となつていきますから。

しかし、中国には中国独自の歴史があつて、列強との関係を政治的に捉えようとする力が強く働きます。ネットでの最初の反応がきわめて政治的のものになりやすいのも、こうした理由によるのです。もちろん、時間がたつと、経済的な利害や心理的な問題も議論されるようになるのですが。

園田 わかりやすい説明ですね。

劉 この点、日中双方が十分に理解しておく必要があると思います。私自身、日本の文化が好きです。映画やモダン・アート、工業デザイン……。この点では、他の中国人も同じはずで、高学歴者が反目的であるとする分析結果を鵜呑みにするのは、現実を捉え損なつてしまうと思います。日本に対して強い意見を持つのは、複雑な現象のある一面を示しているにすぎません。

園田 もちろん、その点は理解しているつもりです。政治と文化のどちらに注目するかで、日中関係の将来も違って見えてくるでしょう。政治の領域では、依然として冷戦時代からの慣性力が働いていて……。

劉 慣性力が働くだけでなく、中国の人々自身による、中国の将来への問いかけの結果でもあります。他の大国とどのような関係を構築し、中国がどのような位置を占めるようになるのか。中国人は、こうした問題に直面し、自分たちなりに答えを出しています。

私自身は平和主義者で、平和を構築するために努力すべきだと考える方ですが、今の若い人たちには、違う考え方の持ち主も多い。戦後六〇年以上の月日がたち、外国と戦つた経験のない若者たちは、戦争がいかに悲惨なものかを理解していません。

園田 この点では、今の日本も同じですよ。

劉 だから中国で、平和教育が必要なのです。

園田 また教育の重要性、ですか？(笑)

劉 もちろん、健全な市民社会を作り上げることも重要ですよ(笑)。

### 信頼形成という喫緊の課題

園田 劉さんは二〇〇四年に、都市部の市民を対象に義捐活動に関する調査を行い、論文を書いていますね。この論文の議論はきわめてクリアで、学歴が高く収入の高い層で寄付への意欲が強くなっていると結論づけています。

劉 結果はそうなのですが、彼らは自分たちの寄付したお金が、寄付したい先に届いているかどうか疑問に思い、なかなか実際の寄付活動につながっていないという問題があります。

園田 寄付を集めた組織を信頼していないということですか？

劉 ええ。彼らは、寄付をしたくても、どの組織を信頼してよいかわからないといった現実があるのです。

実際、現代中国では社会的信頼が大きく揺らいでいます。食品会社や製薬会社が虚偽の成分表示をして、多くの犠牲者が生まれたことが問題になりましたが、こうした現象があとこちで起きています。

園田 こうした場合、しばしば政府が企業を取り締まるべきだという議論になるのですが、これは逆説的な状況です。社会的信頼を作り上げなければならぬのは、本来、政府から相対的に独立した個人なのですから。ところが、「悪い企業を政府は取り締められ」とばかり政府に依存してしまうことになれば、自律的な市民によって構成されるはずの市民社会は、いつまでたっても成熟しなくなってしまう。

劉 もちろんそうでしょうが、他方で、一般の市民が食品や薬品に対して正確な知識を持ち得ないという現実もあります。「強い政府と弱い社会」というのが中国の現実で、市民社会が成熟するまでには、まだまだ時間がかかると考えるべきでしょう。

しかも、強い政府といっても、県や郷など地方の末端レベルになると、そのガバナンスには問題が少なくない。

園田 市民社会といえば、あなたは社会運動(social movement)に関しても研究していましたね。



### 拡がる市民型社会運動

劉 ええ。ただ最近では、集合行動(collective action)という概念を用いるようになってきます。というのも、この種の動きは、不定期かつインフォーマルな性格を持っているからです。

集合行動は、人々が苦しみを味わい、そうした現状を変えたいとして起こす行動ですが、その行動は危険なものではありません。ただ、これが社会的不安定や地方政府の無能を示すシンボルの機能を持っているため、政府、特に地方政府は、こうした集合行動を毛嫌いし、抑圧することから問題がややこしくなってきました。集合行動が生じるのは自然なことですから、むしろこれを出表するチャンネルを構築することを考えた方がよいと思います。

園田 私も、その意見に賛成ですね。

二〇〇五年に反日デモが起きた時、日本では蜂の巣をつついたような騒ぎになり、「言論の自由のない人たちがデモをしたのだから、官製デモに違いない」とか、「これは中国崩壊の予兆だ」といった議論が出てきたのですが、むしろ、こうしたデモが可能になったことを当然のこととして受け止め、日本人の側も「一緒に将来のことを考えようじゃないか」と考えるべきだったのではないかと思っています。

劉 反日デモの場合には、一般的な集合行動とは異なっています。苦しみを味わった人がデモに参加して政府に嘆願するといったパターンとは、明らかに違っているからです。

中国国内で生じている集合行動のほとんどは、日常的な利益に関係したローカルな現象で、中国全土に拡がるような性格を持ち合わせていません。もちろん、人々が苦しみを味わう理由は多様で、それゆえ実際の行動も多様です。

時に、偶発的な集合行動が制度化され組織化されることで、社会運動へと変化してゆくこともありますが、多くは市民型社会運動(civic social movement)と呼ばれるもので、環境保護やエコロジー、動物の保護、慈善活動、女性や子どもの権利保護、セックス産業従事者の権利主張など、その目的や形態はさまざまです。

園田 セックス産業従事者？

劉 ええ。実際、こうした運動に参加している人たちは、特定の苦しみを味わっているというより、みずからの利益や主義・主張をもとに組織を作っています。

園田 こうした市民型社会運動が拡がっているのですか？

劉 はい。そして、こうした組織が社会運動を後押ししている側面があります。また、



それ以外に、反米や反日を掲げたデモなど政治化された運動があり、そのダイナミズムや担い手は、他の運動とは異なっています。

「世界のの中の中国」を想起することの意味

園田 最後に質問が一つあります。今日の対談では、いろいろな問題を実にクリアに論じてくれましたが、あなた自身、中国の将来を楽観していますか、それとも悲観していますか？ たとえば二〇二〇年の中国は、今よりよくなっていると思いますか、それとも悪くなっていると思いますか？

劉 四年くらい前まで、悲観的な考え方に傾いていましたが、今はずいぶん楽観的になっっています。

第一に、中央政府が「和谐社会」と言い出したのが大きいですね。第二に、実際に、政府自身が変わりました。ここ数年の間に、政府は財の再分配に大きく政策転換をしました。マイノリティや貧しい人々にも目を向けるようになった点は評価してしすぎることはありません。医療改革や社会保障改革は、よい方向に向かっていると思います。

園田 この点では、他の対談者の方々と、考え方が似ていますね。

劉 それ以上に重要なのが、中国が世界の中で孤立していないということです。

グローバル化が進展し、インターネットが普及していますが、こうした状況にあつて、中国人は、いろいろな人たちと知識や情報を共有し始めている。よき市民とはどのような人たちで、よき生活とはどのような生活か。今でこそ、多くの中国人が当然のようにイメージできるこれらのことを、一〇年前、一般の中国人は想起することができなかった。

ところが今では、中国人自身が、世界の中の中国を語れるようになっていて。直接海外に出てゆくことができることで、多くの知識を得ることができるだけでなく、第三者的視点から、自らを捉えられるようになっていて。よき市民のモデルを共有するようになっていて。

こうした自省作用を通じて、中国はみずからのアイデンティティを再構築することができ、世界の人々から三つの R、Realistic (現実主義的)、Rational (合理的)、Reliable (信頼に値する) な存在として認められることができる。私が、最近になって比較的楽観的なスタンスに変わったのも、こうしたプロセスを通じて、中国がさまざまな困難を克服することができると考えられているからです。

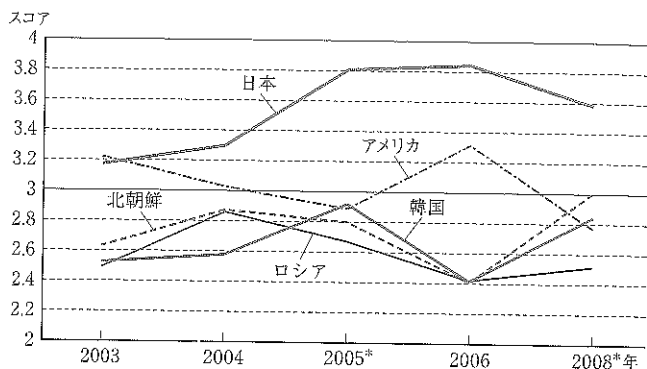
園田 今日は、どうもありがとうございました。



劉能さんとの対談は、突然決まった。もともと、別の研究者にアプローチしていたのがドクキャンされたからなのだが、対談の意義について理解してくれた劉さんとの対談は、スムーズに進んだ。

もつとも、対談記録についてチェックをしたいといってきたのにはびっくりした。「やはり、対談の内容が不安だったのか」と思ったが、後にメールで確認したら、「内容が間違っていないだったので安心した」という。ジャーナリスト相手に話した内容を勝手に変えられてしまった苦い経験があったから、内容を確認したかったということらしい。

対談の内容は、世代論から家庭教育論、サイバー・スペース論、集合行動論まで多岐にわたったが、一番印象深かったのが、インターネットにおけるポスト冷戦的心性に関する部分。中国独自の歴史ゆえ、日本やアメリカとのむすびつきが強まっているにもかかわらず、ネットでは反日的、反米的言説が支配している。ロシアや中国を一方の極、日本やアメリカ、ヨーロッパを他方の極とする思考は、少々平和ボケした、しかし中国人による中国の将来に対する真摯な問いかけの結果だ——劉さんのいうポスト冷戦的心性とは、こうしたものようだ。



注) \*は天津調査、無印はアジア・バロメーターのデータであることを示す。  
スコアは5ポイントで、3が「どちらともいえない」。ポイントが高いほどイメージが悪いことを示す。

図5 中国における対外認識の変化(2003-08年)

実際、中国の対外認識に関する各種データを扱ってみると、ポスト冷戦的心性の存在が強固に存在していることに気づく。

二〇〇三年、二〇〇四年、二〇〇六年のアジア・バロメーター中国調査と、二〇〇五年、二〇〇八年の天津調査のデータを利用して、アメリカからインドまでの一〇の国家に対する評価を主成分分析にかけると、第二因子に、アメリカ、日本、イギリスなどが一つのグループに、ロシア、北朝鮮、パキスタンなどがもう一つのグループに分かれるが、このパターンはこの五年ほどの間に変化していない(ちなみに第一因子はすべての国でプラスになっているので、外国が好き/嫌いという一般的な因子となっている)。



もっとも、絶対的な評価そのものを見ると、主成分分析とはずいぶんと違った印象を受ける。二〇〇三年では、日本とアメリカに対する評価のみが低かったのだが、二〇〇四年から日本への評価の悪さが突出するようになり、これが二〇〇八年まで続いているのである(図5参照)。

こうした日本への評価の悪さは、回答者の年齢とは無関係に拡がっていることから、劉能さんの指摘するインターネットの影響は考えられない。反日的雰囲気<sup>フキ</sup>が拡がっていると理解するのが正しいのだろう。

二〇〇六年に安倍政権ができて対中外交への基本スタンスが変わり、二〇〇七年に発足した福田政権が親中路線<sup>ウチノミチ</sup>を打ち出したにもかかわらず、中国市民の日本イメージがさほど大きく改善していないというのは、劉さんのいうように、ポスト冷戦的体制が維持・強化されるメカニズムが存在しているからに違いない。







9784000238502

ISBN978-4-00-023850-2

C0036 ¥1800E



1920036018000

定価(本体1800円+税)

岩波書店

0800901

